

1. 流域の概要

釧路川は、北海道東部の太平洋側に位置し、その源を藻琴山（標高 1,000m）など屈斜路カルデラの外輪山に発し、カルデラ湖の屈斜路湖から流れ出て、弟子屈原野を流れ、弟子屈町で鑑別川、標茶町でオソベツ川等の支川を合流し、釧路湿原に入り、さらに久著呂川、雪裡川等の支川を湿原内で合わせ、岩保木地点において新釧路川となり釧路市街地を貫流し、太平洋に注ぐ、幹川流路延長 154km、流域面積 2,510km² の一級河川である。

その流域は、釧路市をはじめとする 1 市 3 町 1 村からなり、釧根地域における社会・経済・文化の基盤をなしている。流域の土地利用は、山地等が約 68%、牧草地等の農地が約 21%、釧路湿原が約 8%、宅地等の市街地が約 3% となっている。流域内には、釧根地域の拠点である釧路市等があり、酪農業、水産業、製紙業、観光業等が盛んである。また重要港湾の釧路港、JR根室本線、JR釧網本線、国道 38 号、44 号、241 号、391 号等の基幹交通施設に加え、北海道横断自動車道が整備中であり、交通の要衝となっている。また、上流の屈斜路湖などは阿寒国立公園に、下流の釧路湿原はラムサール条約登録湿地及び釧路湿原国立公園に指定されているなど豊かな自然環境に恵まれている。

このようなことから、本水系の治水・利水・環境についての意義は極めて大きい。

流域の地質は、全体の約 9 割が新第三紀の緑色凝灰岩・火山碎屑物、第四紀の火山噴出物等で覆われ、保水・浸透力の高い地盤を形成している。下流の釧路湿原は約 6,000 年前から形成された厚さ 2~4m の泥炭が堆積する第四紀の沖積層で、周辺丘陵地からの豊富な湧水や地下水が供給されており、また南東部の丘陵地は第四紀の洪積層である。

流域の平均年間降水量は約 1,000~1,200mm であり、下流沿岸部は夏期に海流の影響で霧が多発し日照が遮られる湿潤冷涼な気候である。

現在、釧路川流域には、落差工等の 76 基の横断工作物が存在し、うち直轄管理区間では、本川に 3 基と支川(鑑別川・オソベツ川)に計 2 基の横断工作物が存在する。いずれも整備済みであることから、近年における土砂流出は比較的少なく、安定した河道となっている。

表 1-1 釧路川流域の概要

項 目	諸 元
流路延長	154km
流域面積	2,510km ²

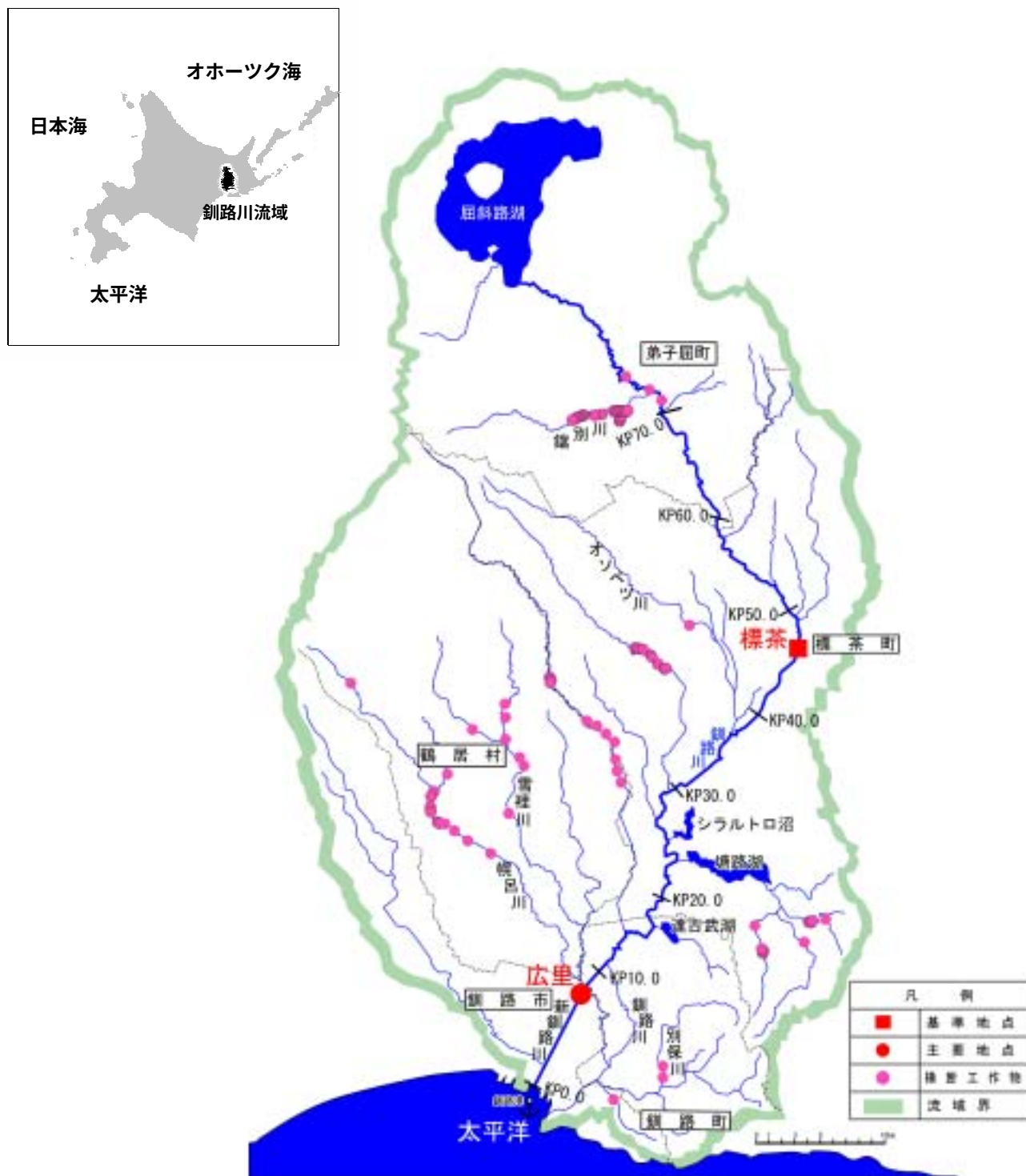


図 1-1 釧路川流域図

2. 河床変動の状況

1) 河床変動の縦断的变化

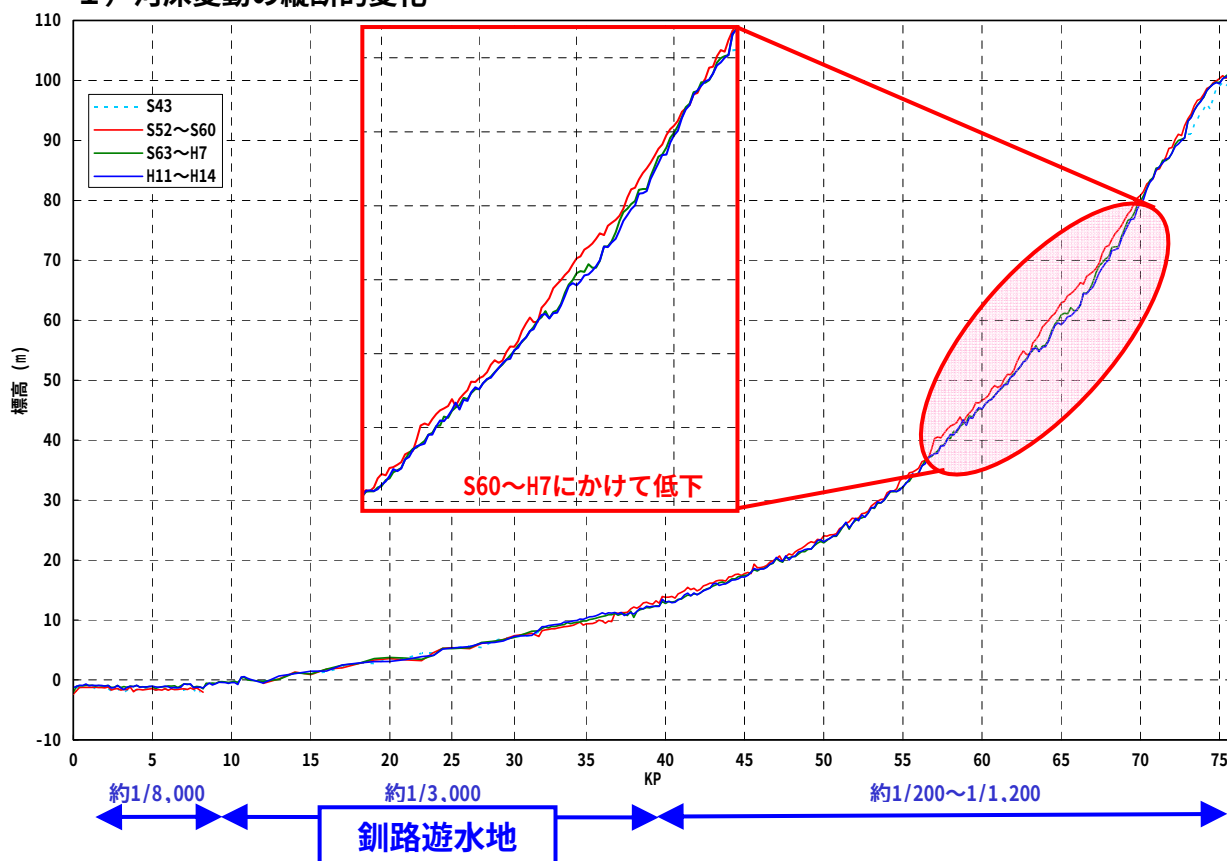


図 2-1 低水路平均河床高縦断図

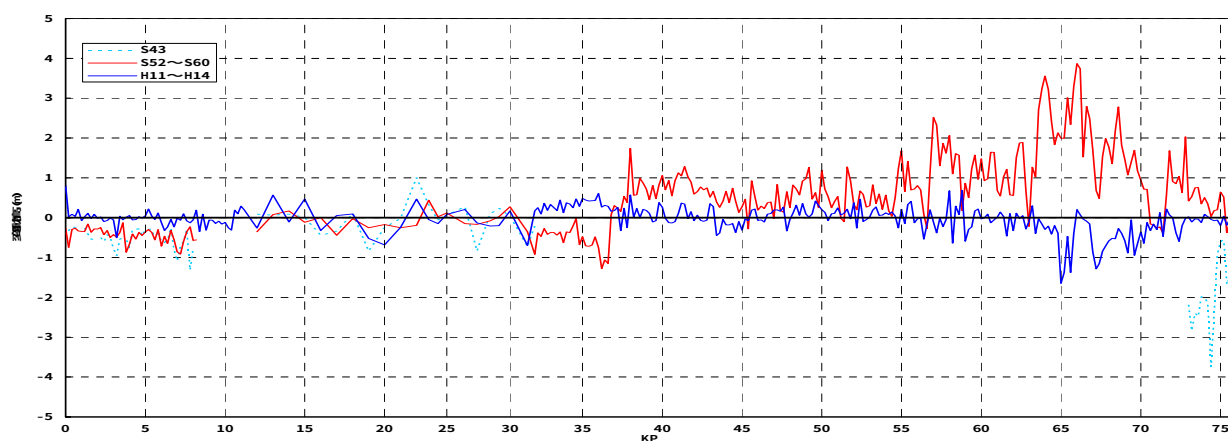


図 2-2 河床変動縦断図(昭和 63 年～平成 7 年基準)

既往 34 年間(昭和 43 年～平成 14 年)の低水路平均河床高は、経年的に見て、上流の河床低下区間を除いて、縦断的に顕著な変動は見られない。また、上流の低下区間についても、その後の平成 7 年～平成 14 年に至っては変化が小さく、近年では比較的安定している。

当河川では、全川における低水路掘削や護岸工事等が実施されている。このような改変直後には河床高が若干低下するものの、その後、それらの箇所において大きな河床高の変動は見られない。

また、河口閉塞は発生していない。

2) 横断形状の変化

新釧路川(釧路川下流域、河口～KP7.4)では、横断形状の顕著な変化は見られない。釧路湿原より上流の釧路川では、河道改修の影響により平成初期に横断形状の変化、河床高の低下がみられるが近年では大きな変化はみられなく、ほぼ安定した河道となっている。また、顕著な侵食・堆積の傾向も見られない。

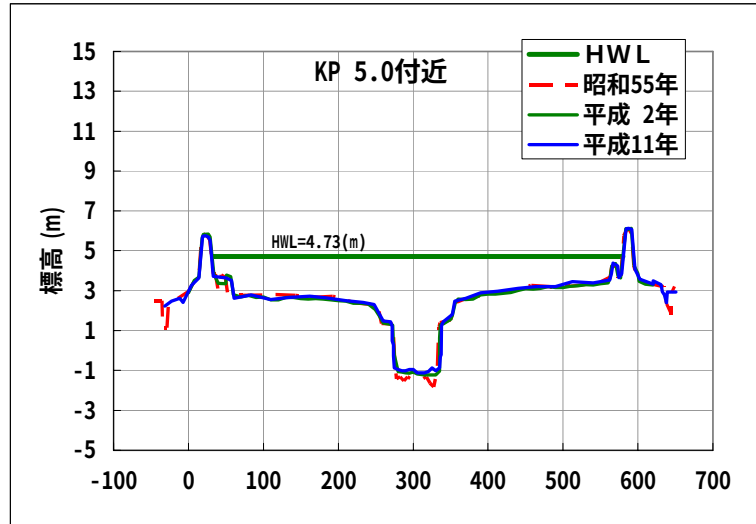


図 2-3 新釧路川(下流域-1 KP5.0 付近) 経年変化横断面図

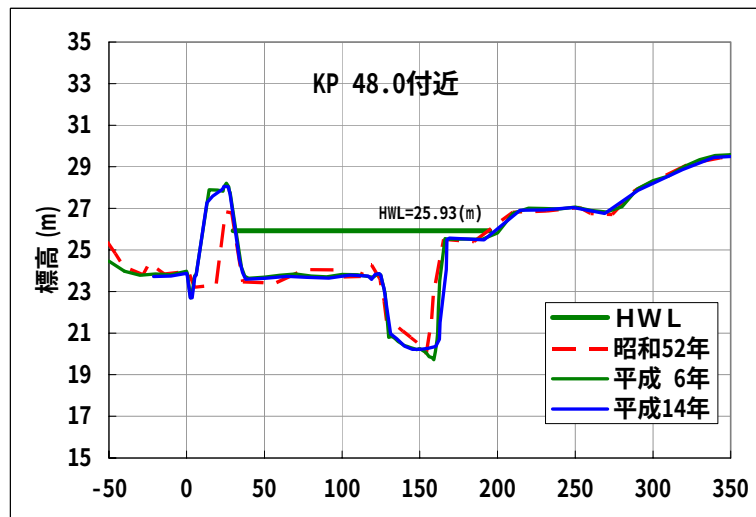


図 2-4 釧路川(下流域-2 KP40.0 付近) 経年変化横断面図

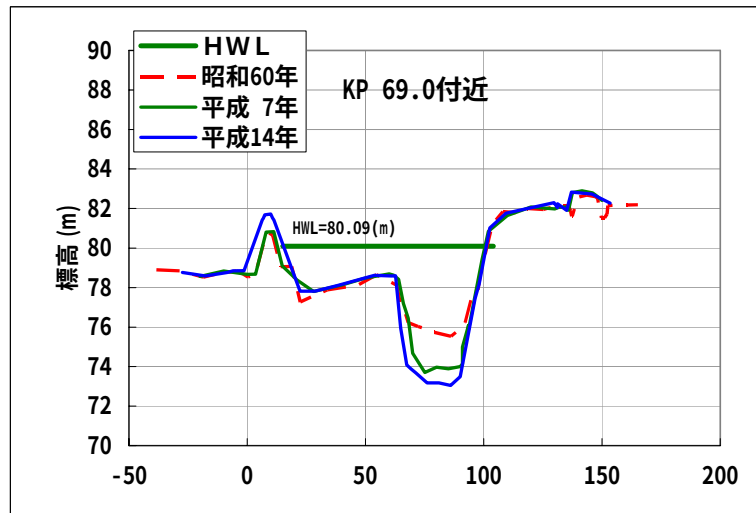


図 2-5 釧路川(中流域 KP69.0 付近) 経年変化横断面図

3) 河床変動の経年的変化

全川にわたり、経年的に、大きな侵食・堆積の傾向は見られない。

既往 34 年間(昭和 43 年～平成 14 年)における全川での河床高の変動量は、低水路掘削や護岸工事等が実施された直後では河床高が若干低下するが、その後それらの箇所において大きな河床高の変動は見られない。また、上流の低下区間についても、平成 7 年以降の近年では、大きな改修も無く、災害復旧の河川改修等、局所的な変動箇所を除き、縦断的に安定している。

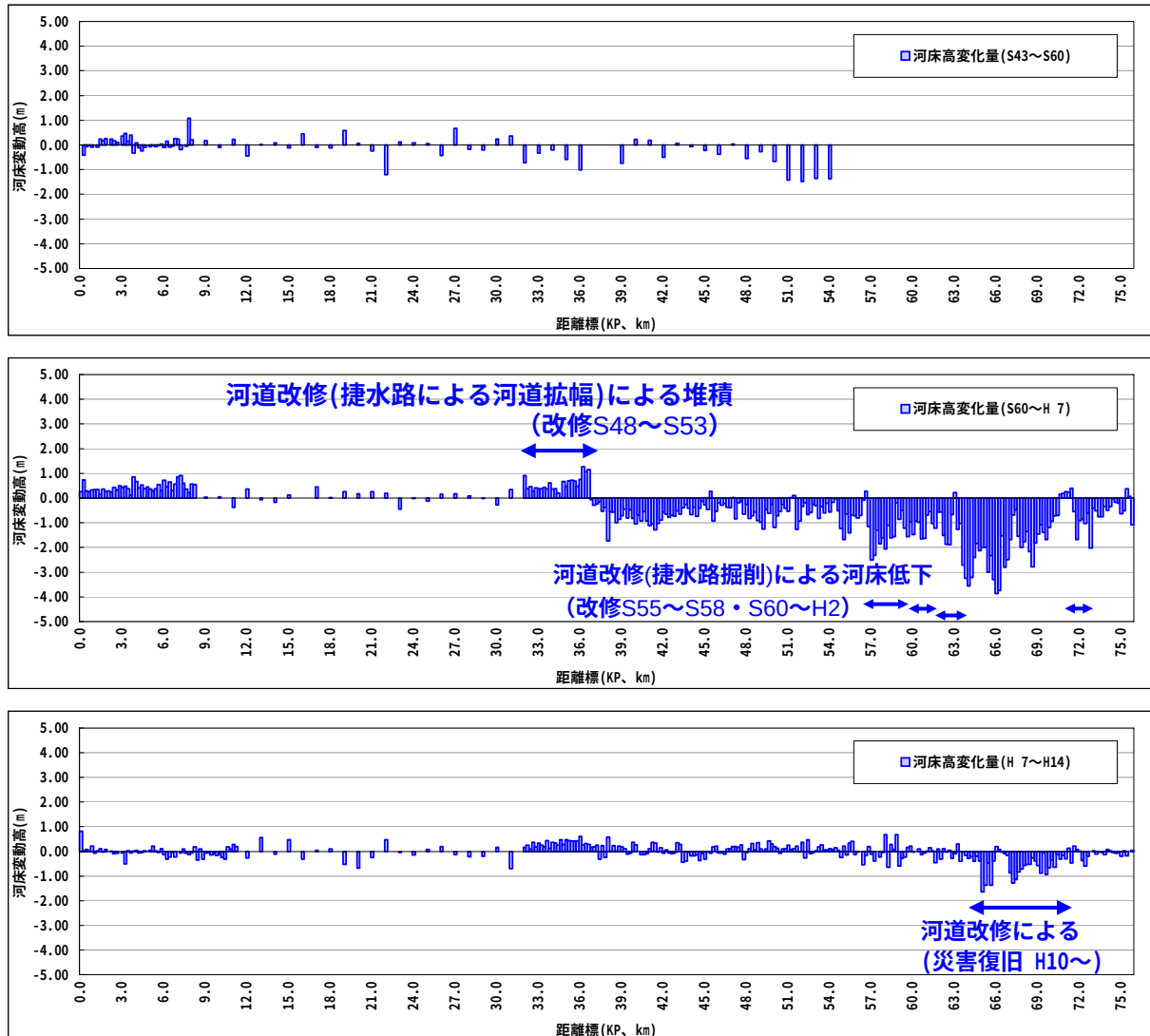
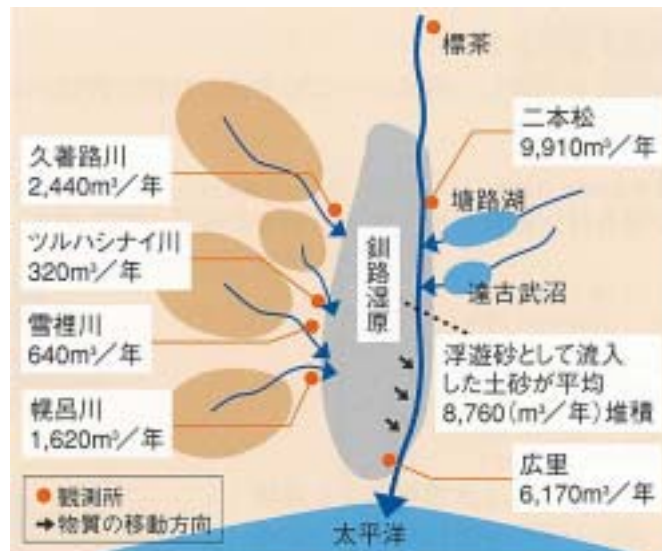


図 2-6 河床変動高経年変化縦断図

4) 釧路湿原への土砂流入

近年、釧路川本川の河床変動は小さいが、釧路湿原では、1960年代から流域の経済活動の拡大に伴い、流域から湿原への土砂流入量が増加している。これは森林が減少し裸地が増加したこと、農地、宅地の開発等のため、河道が直線化され河床が低下したこと、上流・中流での氾濫頻度の減少により土砂が下流まで流出しやすくなったことが原因と考えられる。

その結果、湿原面積が著しく減少し、湿原植生もヨシ-スゲ群落からハンノキ林に変化してきている。



各河川での観測結果より推定（1990-2001年の平均）

図 2-7 主要河川の浮遊砂の収支

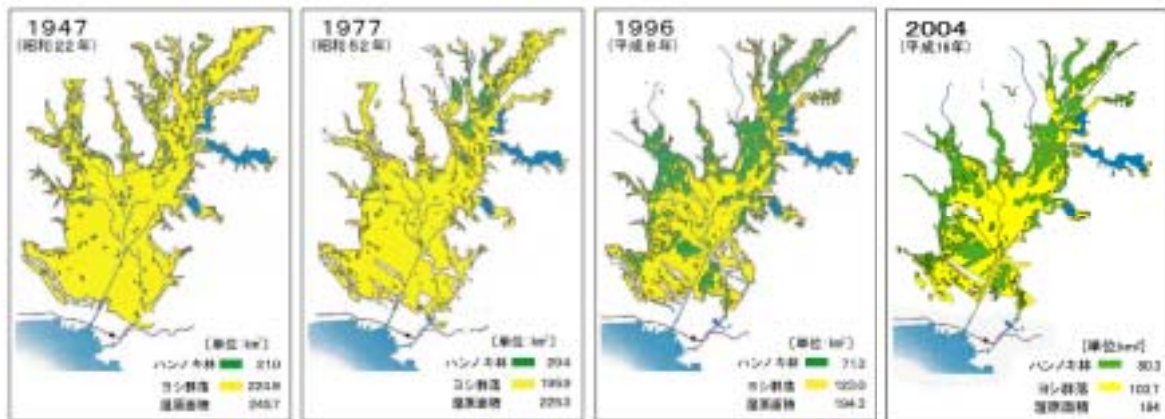


図 2-8 ハンノキ林分布変遷図

3. 河口部の状況

1) 河口部(海浜部)

昭和22～27年頃撮影(昭和42年以前の状況)



昭和45年撮影



平成 8年撮影(垂直写真による現況)



平成15年8月撮影(斜め写真)



図 3-1 河口部の経年変化状況

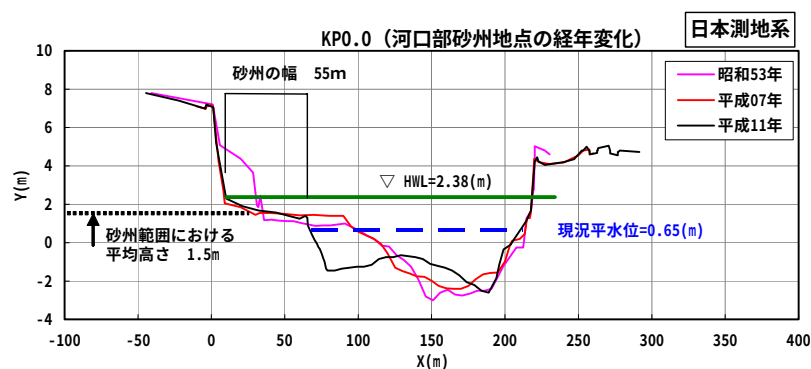


図 3-2 河口部の経年変化状況

昭和の初めごろ河口部の右岸側に砂州が発達しているが、港湾施設の整備に伴い形状が変化している。現在の砂州は、河口の橋梁付近で断面形状が広がっていることによる堆積と考えられる。広い川幅で水深も確保されていることから河口閉塞の実績もない。

4. まとめ

釧路川の土砂動態については、34年間の低水路平均河床高の経年的な縦断変化などについて検討した結果、現在までの改修工事等の影響に伴い、上流部は平成初期に河床低下が生じたが、近年では変動が小さくなっていることから、土砂動態は安定しているといえる。また、その他の区間でも若干の河床高の変動はあるものの、全体的には大きな変化はみられない。河口部についても、港湾施設の整備等により、河口の閉塞や、汀線の変化も見られていない。

引き続き河床変動や各種水理データの収集等モニタリングに努め、適切な河道管理へフィードバックしていく。